

第二十九課

神のみどころにかなう願いをするなら

祈りにおける大胆さ

「何事でも神のみどころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのです。」

(Iヨハネ五・一四、一五)

多くの人々にとって、信仰の祈りの最大の妨げとなるものは、疑いもなく次のことです。すなわち、自分たちの求めが神のみどころにかなっているかどうか分らないことです。この点に疑いがあると、答を得られると確信して求める大胆さがなくなります。そう考え始めると、答が与えられない場合は、神のみどころのままにゆだねてしまうことが最善であるということにしてしまいます。「何事でも神のみどころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださる」というヨハネのことは、彼らの理解によれば、不可能なことになります。何が神のみどころであ

るか、確信できないからです。彼らは、神のみところを、隠れた助言程度に考えていて、全知の神のみところを測り知ることなど、できるはずはないとしてしまうのです。

ヨハネがこれを書いた意図は、これと全く逆で、大胆さと、信頼と、祈りにおける信仰の確信に私たちを目覚めさせようとしています。ヨハネはこう言っています。「これこそ神に対する私たちの確信です」と。私たちもこう言うことができます。「父よ。あなたのみところに従って求めていることは、あなたが御存知であり、私も知っています。私はあなたが私にお聞きくださることを知っています。」「何事でも神のみところになう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。」ヨハネはすぐにこのことばに付け加えて言います。「私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るので」と。ヨハネは、自分の祈りが神のみところになうものかどうかが確かめ得るとしてこう書いています。あなたの祈りは、神のみところになうものかもしれない。しかし、すぐには答がありません。あるいは忍耐強い信仰の祈りなしには答えられないものかもしれません。これに対し、「何事でも神のみところになう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です」ということばが、私たち、忍耐し、信仰を強く持つ勇氣を与えてくれます。自分の願いが神のみところになうのかどうか確信できない時は、「神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るので」と

いうことばによって慰めを受けることはできません。

しかし、これが問題なのです。次のように言う信者は少なくありません。「私には、自分の願いが神のみにかなっているかどうか分りません。神のみところは、神の無限の知恵によるものですから、私が願うものよりも他によいと思われるものがあるかもしれませんし、あるいは、私の願いを拒まれる理由が何かあるのかもしれませんが。理由もなく私の願いを差し止めておられるなどと、私には考えられないのです。」しかし、このような考えに立てば、イエスが、「自分の言ったとおりになると信じるなら、そのとおりになります」と言われた信仰の祈りは成立不可能になるといふことはだれにも分るはずで、服従の祈りはあるかもしれません。神の知恵に信頼する祈りもあるかもしれません。しかし、ここには信仰の祈りがないのです。ここでの大きな誤りは、神の子たちが神のみところを知ることが可能だということを本当に信じていないことにあります。そう信じていたとしても、時間をかけ、苦勞してまで、それを見出そうとしていないのです。私たちに必要なことは、神が、神を待ち望む素直な子を導いて、その願いがみところになうものかどうかを、どのようにして知らせようとされるかをはっきり見極めることなのです。心といのちと意志の中に受けとめられた神のみにことばと、内住し、導いてくださる神の聖霊によって、私たちの願いがみところになうかどうかを知ることができます。

まず、「みことばによって」です。隠された神のみにことがあって、私たちの祈りはそのみこ

ところに合っていないのかもしれないと感じることがあります。私たちが祈りの中で心にとめなければならぬのは、このようなみこころではなく、みことばの中に啓示されたみこころです。多くの場合、隠されたみこころが示されるかもしれないとか、それが祈りの答を不可能にするとかという考えは、たいへんな間違いです。御父が、子たちにしようと思っておいでになることを子供のように信じる信仰は、御父が祈りを聞かれることと、みことばを信じる信仰が願ってそれを受けることをなされることがみこころであるという、御父の保証の中へと導かれます。御父は、御民に対する神の偉大なみこころの原則を一般的な約束という形で啓示されました。子は、その約束を受けとめ、それを自分の生活の中の特定な状況にあてはめなければなりません。啓示されたみこころの範囲内で求めるものは、神のみこころであると知ることができるし、確信をもって期待することができます。それとともに、尊い恵みと力の約束をお与えになり、御民を通して御計画を実行し、みわざを行われます。信仰が強められ大胆にされて、ある特定の事柄に一般的な約束を成就されることを要求できるほどになると、私たちの祈りは聞かれるという確信を持つことができます。先にあげた聖句の次のヨハネのことばを例にあげてみましょう。「だれでも兄弟が死に至らない罪を犯しているのを見たなら、神に求めなさい。そうすれば神はその人のために、死に至らない罪を犯している人々に、いのちをお与えになります。」これは一般的な約束です。この約束を土台にして神に申立てをする信者は、神のみこころに従って祈っているのです。ヨハ

ネは、そのような信者に、神が自分の願いを聞いてくださることを知る大胆さを与えたいと思っているのです。

このように神のみこころを理解することは霊に属することですから、霊的に悟らなければなりません。それは、私たちが議論しなければならない論理の問題ではありません。クリスチャンはだれもが同じ召命の賜物を受けているわけではありません。約束の中に啓示された一般的なみこころはあらゆる人に共通ですが、神の目的に従って、特別な、それぞれ異なったみこころがあります。ここに、聖徒たちの知恵が必要になります。与えられた恵みに従って一人一人に対する特別なみこころを知り、神が約束して可能にしてくださる事柄を祈り求めます。この知恵を授けてくださるために、聖霊が私たちのうちに住んでいてくださるのです。みことばによる一般的約束を、私たちの個人的必要に適用するために聖霊の導きが与えられているのです。

多くの人々は、このみことばと聖霊の結びつきの教えを理解していないので、神のみこころを知る上で二重の困難があります。ある者は、自分の感情や確信の中に神のみこころを求めようとし、みことばを無視して御霊の導きを求めようとします。また、ある者は、聖霊の導きを無視して、みことばの中にみこころを求めようとします。みことばと御霊は結び合えなければなりません。すなわち、みことばのみによることと、御霊のみによることとの両方によって、私たちは確かに神のみこころを知り、みこころに従って祈ることを学び得るのです。心の中で、みことば

と御霊が一致しなければなりません。両者の内住によって初めて、私たちはみことばと御霊の教えを経験できるのです。みことばがうちにとどまり、毎日心といのちがその感化のもとになければなりません。外からではなく内から、御霊によってみことばが生きて働きます。みことばの主権とみところに自分の全生涯を全くささげ切る者のみが、特定の事柄においてみことばとみところが大胆に求めることを許しているものを判断することができます。御霊の場合も、みことばの場合と同じです。神のみところが何であるかを私にはっきり示してくださるように御霊の導きを求めようとするなら、自分の全生涯を導きにゆだねなければなりません。そうすることによって初めて、思いと心は霊的なものとなり、神の聖いみところを知ることができるようになるのです。みことばと御霊によって神のみところを行い、そこに生きる者は、祈りが聞かれるという信仰に立ち、みところに従って祈ることを知ります。

自分たちの祈りは、おそらく神のみところになっていないので、答を与えられなくても満足しなければならぬと考えることで、どれだけ大きな害を自らに招いているかを考えてみてほしいと思います。神のみことばは、聞かれない祈りの大きな原因は、私たちが正しく祈らないからだと教えています。「祈っても与えられないのは、正しく祈らないからです。」御父は答を与えられない時、私たちの祈りにどこか間違ったところがあることを教えてくださいます。御父は、私たちがそれを見出し、告白するように教え、そのゆえに、私たちが本当の信仰と勝利ある祈り

をささげ得るよう教育することを望んでおられます。祈りが聞かれないのは、私たちに責められるべきところがあるからだということを悟らせられる時、御父の目的は達せられるのです。私たちの目的、信仰、生活があるべき姿にないからです。しかし、この神の目的も、「私の祈りが聞いていただけないのは、みこころにかなっていないからなのだろう」と言っているうちは、いつまでも遂げられないままでしょう。祈りが聞かれない原因を神の隠れたみこころに求めることをやめて、自分の誤った祈りにあることを認めましょう。「祈っても与えられないのは、正しく祈らないからです。」このことばを主の灯として私たちの心と生活を照らし、私たちがキリストの答の約束を与えられた者たちであることを証明していただきます。私たちの祈りが、神のみこころにかなうものであることを知ることができるといふことを信じていものです。私たちは、御父のみことばに豊かに心に宿っていただき、また、キリストのみことばが私たちにとどまるようにしていただきます。毎日、すべてのことを教えてくださる御霊とともに生きますように。聖霊は、私たちがキリストにとどまること、御父の御前に生きることを教えてくださいます。ですから、聖霊に自分自身をささげましょう。そうすれば、御父のみこころを知り、そのみこころには、御父の力と愛がなすと約束されたすべてのことが含まれていると確信することができま

す。そして、御父は、求めることを聞いてくださると知るようになります。御父が愛をもってこれを切望しておられることを私たちはすぐに理解できます。「何事でも神のみこころにかなう願

いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。」

恵み深い主よ。祈りの答の満ちた生活への道は、神のみところを通して行く道であるというこの尊い学課を心から感謝いたします。主よ。私がいまを生きることによって、愛することによって、いつもそれに従うことによつて、恵みに満ちたみところを知ることが出来ますように、私を教えてください。そうすれば、私はそのみところに従つて祈りをささげることができ、神の恵みに満ちたみところと一致することによつて祈りが大胆になり、答をいただける確信を持つことが出来ます。

御父よ。あなたの子供が、御臨在と祝福にあずかることがあなたのみところです。あなたの子供の生活のあらゆる点がいまにかない、聖霊がうちに働いてくださることがあなたのみところです。あなたの子供が、毎日の生活で、はっきり祈りの答を体験し、あなたとの生活と直接の交わりをいただくことがあなたのみところです。あなたの子供のうちに、また、あなたを信頼する者のうちに御名の栄光が現れるのがあなたのみところです。ああ、私の父よ。どんなことを求める時も、このあなたのみところが私の確信となりますように。

恵み深い主よ。このみこころの栄光を信じることを教えてください。このみこころは永遠の愛であり、みことばに従うそれぞれの人間の意志の中に、神の力を伴って働きます。主よ。このことを私に教えてください。あなたは、みことばのあらゆる約束と命令が、事実神のみこころであり、その成就是神御自身によって保証されていることを悟らせることがおできになるお方です。このように、神のみこころを私にとっての堅固な岩としてください。私の祈りと答の確信は、いつまでもこの岩をより所といたします。アーメン。

注

神のみこころについては、しばしば大きな混乱が起ります。神のみこころは、必ずなるべきものだと思える人がいます。しかし、決してそういうものではありません。神は、民に多くの祝福をもたらしたいと願っておられますが、実現するものは少ないのです。神が熱心に願われても、人々が本気に願わないので実現しないのです。これは、創造において自由意志が与えられたこと、また、贖いによって意志を新たにされたこととの一大奥義にあります。神は、多くの場合、人間の意志に応じてみこころを実行なさいます。神のみこころは、約束の中に啓示されており、私たちの信仰がそれを受け入れる時に成就します。祈りは、他の手段では実現できないものを実現させる力です。信仰は、神のみこころがどれほど自分のうちに成就するかを決定する力です。ひとたび、神が私たちのたましいにみこころを示されたら、その実現の責任は私たちにあります。

す。

ある人たちは、この考えは、あまりにも人間の手に多くの責任を負わせすぎると考えます。しかし、キリスト・イエスにあつて、あらゆる力は人の手にゆだねられているのです。あらゆる祈りと力のかぎは、キリストの御手にあります。そして、キリストが御父と一つであるように、私たちとも一つとなつてくださることを理解すると、キリストが御父のうちにとどまつているように、キリストのうちにとどまる者たちにはその力が与えられることがごく自然で、正しく、安全であることが分るでしょう。御自分の欲するものを求める権利をお持ちの方は、御子イエス・キリストです。私たちがキリストのうちにとどまり、キリストが私たちのうちにとどまることによつて——これは私たちがほとんど理解できていないことですが——御霊は、御子が何を求め、私たちによつて何を獲得なさろうとしておいでになるかを示してください。私たちは御霊によつて祈ります。祈りは、真実に私たちのものであると同時に、真実にキリストのものであります。

祈りがそのように神の自由と愛を制限してしまう力を持つことを信じるのをためらう者たちもいます。神が行動を起される唯一の方法である祈りと信仰——神は今、私たちを御自身との交わりにあずからせていく。くださる——によつてお働きになるのを、私たちが許さないで、神の自由と愛とを制限してしまつていことを知るべきです。このことを話し合っている時、ある牧師がこう言いました。「たましいに対する私たちの愛と、彼らが祝福されるようにという私たちの願いが、神の愛と、神の祝福したいという願いを動かすことになるとする考えに危険はないでしょうか。」私たちは、大きな山の水流を、丘や谷を越えて離れた町に運ぶパイプであるにすぎません。このパイプを見れば答が分ります。水が丘から下に落ちるように、水そのものをけしかけたわけではありません。その祝福と、気分を回復させる力を水に与えたわけでもありません。それはもともと水に備つたものです。人々にできることは、流れの方向を決めることです。それによつて、

町の人は望む祝福を得られます。同様に、愛し、祝福することは、神にもともと備わった御性質です。神の愛は、いつも生かし元気を回復させる流れを伴って下の方へくだりたいと望んでいます。しかし、荒野のどこへ生きた水を届けるかということは、祈りに任せておいでになります。祝福をもたらす神のみところは、その祝福がもたらされる場所を定める人間の祈りにかかっているのです。「それは、すべての聖徒の誉れである。」「何事でも神のみところになう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのです。」